

## 第2学年1組 国語科

### 自ら問いを立て、協働して解決を目指す授業実践

—盆土産を主体的に読み、授業を生徒が創ることで主題に迫る—

高松 由紀子

今年度の国語科は「協働して課題解決を目指しながら、言葉の力を育む生徒」を目指し授業に取り組んでいる。盆土産では、自分達で学習課題を考え、協働して解決するのにふさわしいかどうかを考え、学習課題を絞った。課題追究にあたっては、「広げる時間・深める時間・再考して主題に迫る時間」という段階を経ながら、多様なメンバーで協働して解決を目指す授業を行った。授業を展開する中で、教材文を課題解決のためだけに読むのではなく、自分だったらこう読み解く等主体的に教材文に向き合い、他者の考えを聞きながら自分の考えを深めていた。協働して解決を目指すことが主体的な読みにつながり、主体的に読むことによってさらに協働での読みが深まったといえる。

#### 1. はじめに

##### 主体的に読み、生徒が創る授業への挑戦

盆土産は、昭和30年代の東北地方の田舎を舞台にした小説である。東京に出稼ぎ中の父が盆土産として、当時珍しかった『冷凍食品のえびフライ』を持ち帰り、家族で味わったり交流したりする中で、登場人物の思いや絆がじんわりと伝わってくる内容である。

教科書掲載が長く続き、味わい深い作品であるにもかかわらず、今までは教師側からいくつかの発問を投げかけて、おもしろさをなんとなく読み取ることが多かった。

主体的に読むとはどういうことなのだろうか。授業改善に向けて手がかりとなったのが、昨年度視察した京都市立東山泉小中学校の取組である。生徒が「問いを立てる」ことを大切にした授業がどの教科でも行われていた。

与えられた課題ではなく、生徒自身が疑問や学習したいことを考え、それを軸に生徒の力で授業を展開することを国語科でも目指したいと考え、挑戦することとした。

まず、2年生では、「バイオロギングの可能性」という説明文で、問いを立てる練習をした。初めての経験で、しかも説明文だったため、どういものが学習課題としてふさわしいか考えることが難しく、よい課題づくりには程遠いものになってしまった。

次に、全体で深まる学習課題を考えようということで、随筆「字のない葉書」で取り組んだ。話し合

いの中で、すぐに答えが見つかるようなものや、みんなで考えて意味がないものはやめようという声が上がったり、課題づくりで手応えを感じた。しかし、生徒が授業をやる段階で、見通しが甘かったり考えをうまく伝えられなかったりと反省点も多く見られた。

「字のない葉書」の振り返りで、紘子は次のように書いている。

「この話は戦争の話で、最初は悲しい話だと思っていたけど、授業を繰り返していくうちに、悲しいというより気持ちがとても温くなる内容だと気づきました。この学習をして、私はいつもより発表した内容について、つっこむことができるようになりました。内容についてつっこむことで、もっと詳しく深い考えが出たのでこれからもつっこんでいきたいです。

授業では、班の意見を出し合った後に、他の班と交流し、さらに自分達で授業を試してみるというのはとても難しいことだったけど、やってみてよかったと思いました。発表の仕方をもっと工夫すればよかったのではないかと思います。」

1年生の時の紘子は、受け身的で当てられてもはっきりと考えを述べる様子はあまり見られなかった。しかし、2年になり、学習課題をつくったりグループ活動で話し合ったりする中で、少しずつ発言が目立つようになった。この振り返りでも協働で取り組むことの意義を感じ、授業によって考えが変容していることがわかる。また、改善点

を書いていることで次への強い意欲も感じられる。

本単元でも、生徒が学習課題を立て協働で解決を目指す授業を試みたが、紘子の学びを追うことで本実践をまとめてみたいと思う。

## 2. 学びの実際

### (1) 問いを立てる (第1時)

盆土産の初発の感想の代わりとして、問いかけた。「この話はおもしろかったか、いまいちだったか。」紘子は、いまいちに挙手し、理由を次のように書いた。

この話は少し難しく、内容が頭の中で整理がつかなかった。方言が多いから聞き取りづらかった。普通は、えびフライについて、発音がむずかしいなんて言う人はいないと思うのに、それについて書いてあるので、少しいまいちだと思う。

次に、学習課題をつくることを家庭学習にしたところ、紘子は10個以上の課題を考えてきた。初発のいまいちの理由に挙げていたことを疑問や課題として解決したいという思いが伝わってきた。また、物語の本質に迫るような課題も考えていた。

- なぜえびフライについて書いたのか
- えびフライの何を伝えたかったのか
- 主人公はどれくらいの歳でどんな子だったのか
- 「えびフライ」や「えんびフライ」を繰り返す意味
- えびフライに込められた思い
- 当たり前のことを詳しく説明しているのはなぜか
- なぜえびフライを食べたことがなかったのか
- なぜ方言を使ったのか
- えびフライのおいしさを表す言葉はどれなのか
- ドライアイスを食べようとしたわけ
- 盆土産とえびフライはどんな関係なのか
- 最終的には何を伝えたかったのか

### (2) 課題を絞る (第2時～3時)

各自が考えてきた学習課題を生徒同士で吟味し、取捨選択して絞る学習を行った。

紘子の班では、自分がつくった課題を一通り発表し合ってから、絞るための話し合いになった。

杏奈：どうして土産がえびフライなんかな。

太郎：いつの時代？最終的にえびフライの何を伝えたかったのかな。

紘子：えびフライにどんな思いを込めていたのかはど

う？えびフライを食べて気持ちが変わったんやで、いるやろ。

杏奈：私もえびフライに関連した課題がいいと思う。頭の中から離れなかったところもあるし。

紘子：えびフライにどんな気持ちを抱いていたかは？

太郎：気持ちじゃなくて、思いの方がいい。えびフライは主人公にとってどんな存在で、どんな思いを抱いていたかにしよう。

なかなかかみあわない会話の中でも、紘子は、班のメンバーに対し、えびフライに対する主人公の思いを課題にしたいと何度も提案していた。その甲斐あってかその課題が班で選ばれ、紘子はノートに嬉しそうに☆をつけた。

班ごとに学習課題としてふさわしいものを出し合い、全体で話し合うことになった。班ごとの課題は予想を越えて数が多く、内容も多岐にわたっていた。ある生徒が「どうやって決めればいいのかわからん」とつぶやいた。そこで、どういう観点で決めるかを全体で考えさせたところ、最終ゴールを先に決め、ゴールに向けてふさわしいものを絞っていきたいという意見が出た。そこで、まず最終ゴール（単元を貫く問い）を検討することになった。

課題の中から、最終ゴールとして見合うものを取り上げ手直した結果、次の2つになった。

- ①『家族にとってえびフライとはどんな存在だったのか』
- ②『物語を通して、作者が伝えたかったことは何か』

ゴールが2つになったのは、①の課題を考えることで、②の主題に迫れるのではないかという生徒の考えが出て、生徒が一同に納得したからである。

そして、この最終ゴールを目指すための学習課題について検討した。

自分の班で選び抜いた課題の意義やみんなで考えるにふさわしい根拠等を具体的に挙げるように指示したところ、話し合いは大変白熱したものになった。5班から次のような提案があり、それに対し質問や意見が飛び交う事態になった。

5班：えびフライは特別なものでもないのに、なぜ作者はこんな普通のえびフライや生活を登場させたのかを考えるといいと思う。

雅之：この家族にとってはえびフライは特別じゃないの

か。それがどう課題になるのか？

5班：初めて食べるえびフライは特別かもしれないが、この話自体、お盆の時期の生活のことが描かれているので、なんてかなと思って課題にしたかった。

美幸：作者の立場で考えるといいんじゃないか。

公平：作者がなぜ普段の生活のことを書いたのかは？

5班：前に学習した「字のない葉書」は戦争中の話で特殊だった。普段の生活を取り上げたことをみんなで考えることで、作者がこの作品にどんな思いを込めたのか最終ゴールに近づけると思う。

生徒は、自分達の班としての思いを伝えながらも、他の意見を聞いてその場その場で修正を重ねながら自分達の学習課題をつくっていった。このような話し合いを経て、学習課題を次の5つに絞った。

- a 主人公のえびフライに対する思いの変化
- b 最後の父との別れの場面での父と主人公の思い
- c 父はなぜ盆土産にえびフライを選んだのだろうか
- d 題名が盆土産なのはなぜか（えびフライでないのはなぜか）
- e なぜ普段の生活の中の話にしたのだろうか

学習課題を絞る段階で2時間を費やしたが、課題としてふさわしいかどうかの議論そのものに大変意味があったと考える。これがまさしく主体的な読みと言えるのではないだろうか。生徒は表現に即した根拠を挙げながら、納得がいくまで自分の考えを述べていた。だからこそ、決定した学習課題はクラス全体のものであり、また個々人のものとして意欲をもって解決したいというものになったのではないかと考える。

### (3) 課題の追究 (第4～9時)

#### 3段階で深める課題追究

学習課題についての自分なりの考えを、根拠を入れてまとめてくることを家庭学習で行い、第4時がスタートした。班で課題についての考えを出し合い、交流する時間を設けた。これは、自分の考えを『広げる』ことを目的とした。

第5時は、『深める』時間として、ジグソー法を用い、班で広がった考えを新しいチームに持ち寄り、同じ課題についてさらに深く考えることを目的とした。

#### <課題追究の構想>

- ① **広げる時間** <班活動>  
↓  
自分の考えを伝える  
他の考えを聞く
- ② **深める時間** <課題ごとのチーム>  
↓  
一つの課題に向き合い徹底的に話し合い、授業を考える
- ③ **再考して主題に迫る時間** <全体>  
課題ごとチームによる授業  
新たな課題を提示し、全員でさらに考えることで主題に迫っていく

#### 主人公のえびフライに対する思いの変化を捉える

紘子は、Cチームとして『主人公のえびフライに対する思いの変化』について担当し、探究することとなった。最初紘子は、思いの変化を『食べる前（はじめ）・食べている途中・食べた後（終わり）』と3つに分けて考えてきた。えびフライに対して、早く食べたい、おいしい、また食べたいとえびフライ＝単なる食べ物としての感情が中心にまとめてあった。

しかし、課題ごとのCチームで話し合ううちに、えびフライの存在そのものがどういうものであったかということに考えが及んでいき、えびフライに対する思いの大きさを強く感じるようになった。

この話し合いを軸として、Cチームでは、授業の展開を考え『再考して主題に迫る』時間へと移っていった。

授業では、えびフライ＝特別な存在であることを強調し、新しい課題として、次のように問いかけた。

紘子：最初は、えびフライを食べたいとか楽しみとかの単純なものだったが、最終的に特別なものになった。どこをきっかけに特別な気持ちになったか、理由も含めて考えてください。

この提示を受け、どこがきっかけかグループで話し合い、発表した。

陽介：主人公がえびフライを食べている途中だと思  
う。食べてしまったら、父親が東京に帰ってしま  
い、家族の時間がなくなってしまうと感じた  
と思うから。

拓也：今夜の夜行で東京に戻ると言い出した場面。父  
が予定より早く戻ってしまうと聞いたとき、  
父といたことを振り返って、父とたくさん話  
せて関係が深まったことに気づいたのでは。

太郎：最後の別れの場面の父の言葉「こんだ正月に帰る  
すけ、もっとゆっくり」だと思う。父が  
またお土産を持って帰ってくれるかもという  
期待が表れているから

健太：最後のうっかり「えんぴフライ」と言ってしまう  
場面。食べる前は何度もつぶやいていたけど、  
最後にまた食べたいという気持ちが強くなって、  
我慢できなくて言ってしまったと思う。だからこ  
のとき、えびフライが特別な存在だと気づいたの  
ではないか。

自分達としては、健太の班が考えたように、最  
後のうっかり「えんぴフライ」と言ってしまう場  
面と捉えていたが、他の班が予想以上に違う場面  
を発表し、驚いていた様子がみてとれた。



生徒が発問し、生徒が考えを述べる姿

### 題名を「盆土産」にした理由を考える

紘子は、最初の家庭学習で、題名をえびフライ  
にした理由を次のようにまとめてきた。

内容はえびフライについてたくさん書いてあるけれど、  
「盆には帰る」という文から、盆の土産としてえびフライ  
を初めて買ってきてくれたので、お盆の思い出として題名  
にしたかったのだと思う。

授業はAチームが行った。題名をえびフライに  
しなかった理由と盆土産にした理由を説明した  
後、みんなで深める課題として、『盆土産に含まれ  
ているのは何か』を提示し、班で考えることにな  
った。

紘子の班では、今までの読み取りを踏まえ、え  
びフライがどういう存在だったかについて話が進  
み、次の考えを発表した。

紘子：盆土産に含まれるのは、えびフライ以外に、  
父がつくってくれた家族の時間もお土産とし  
て含まれると思う。

他の3つの班も、紘子と同様に父の家族を大切  
に思う気持ちや愛情という考えだったのに対し、  
残りの2つの班からは次のような考えが出てき  
た。

章恵：父が帰ってくることで自家家族が嬉しいこと  
なので、父親も盆土産じゃないかと思う。

太郎：盆土産にはドライアイスも含まれていると思  
う。ドライアイスは冷凍食品であるえびフライ  
を溶けないようにするためのもので、大変  
さが詰まっていると思う。

この発言が出たとき、クラスは一瞬えっという  
雰囲気になり、ざわめきが起こった。今までな  
ら、考えをそのままとめて終了ということにな  
ったのであろうが…。

しかし、Aチームはこれで終わらせなかった。  
この発言の中で、ドライアイスを取り上げ、さら  
に新しい課題として、『ドライアイスには、父のど  
んな思いが含まれているか』を提示して、再び考  
えることになった。

春樹：一晩中眠りを寸断しているところから、家  
族においしいものを食べさせたいという気  
持ちがわかる。

俊也：ドライアイスを小出しにしながらという表  
現から、寝ないでやっていたことがわかる。新鮮  
なものを食べさせたい気持ちが伝わってくる。

出た考えをもとにさらに追究することで、ドラ  
イアイスと父の思いが繋がったのである。直  
接、題名を盆土産にした理由についての話し合  
いはなかったが、このやりとりを通して、もっと深

く『盆土産』という題名に込められたものを感じることができた時間になった。

学習後、紘子は自分のノートに青ペンで次のように書き足した。

盆土産=えびフライではない!!

今日の授業で、紘子の学びが深まった瞬間だった。



盆土産に含まれているのは何かを図入りで説明

#### (4) 主題に迫る (第10時)

##### 最終ゴールについて考える

今までの授業を踏まえ、最終ゴールである課題について、班で考えた後、全体で共有することにした。

『家族にとってえびフライとはどんな存在だったのか』

班で出てきたのが、次の考えである。

- 家族の時間をつくってくれた思い出のもの
- 父の思い出詰まったもの
- 家族をつなげ、いろいろなものを共有できた
- えびフライを見るだけで父を思い出すもの

共有したのはなんだろう？とさらに考えさせるところ、えびフライのおいしさ、家族との会話、父の気持ちが出てきた。

『物語を通して、作者が伝えなかったことは何か』

作者が伝えなかったことや、この物語から何が伝わってきたかについて話し合った。本単元の集大成としての学習であったが、今までの学習で十分に練り上げてきたので、家族についてのことばかりであろうと思っていたが違っていた。出てきた考えは次の通りである。

- 家族の時間の大切さ
- 家族の絆
- 家族への感謝
- ささいな日常のできごとの大切さ
- 当たり前なのが当たり前でなく、一つ一つのことが幸せであること

学習課題の一つにもあったように、この話が日常の生活を描いていることと関連づけ、日々の幸せや何気ない日常の大切さを感じ取っている生徒が多く見られたのも大きな収穫であった。

### 3. 実践を振り返って

#### 紘子の変容から

本単元の学習の最後に、この授業の振り返りを書いた。紘子はノートに次のように振り返った。

私の生活の中では、えびフライというのは当たり前のものなので、最初主人公に疑問を持ってしまいちな話と思っていたが、全然そうではなかったのでびっくりした。また、日常生活の中での思い出が書かれていたので、私は日常生活や家族というものの大切さももっと深く知ることができ、これからも普段の当たり前の生活を大切にしたいと思った。

自分達で授業するというのは2回目、前と比べるとみんなの意見が出た後で、それをもっと深くするためにみんなに課題をふることができた。

この盆土産で、前の自分よりもレベルアップしたと思う。課題について考えることは難しいことだけれど、とても楽しいと思えるようになった。一つ楽しいことが増えて自信がついたので、これからも自信をつけていきたい。まだ考えるだけで発表ができていないと思うので、これからは発表を頑張りたい。

振り返りを通して、紘子は初読の自分と今を比較し、盆土産の話のおもしろさを感じ、自分の考えが大きく変わっていることに気づくことができた。

授業の中では、前単元の「字のない葉書」で課題としていた発表の仕方を工夫することにおいて、本単元ではみんなの意見をもとにして新たな課題を示し、なぜそう思うのか聞き返す場面もあった。自分が主体的に深く読み込んでいるからこそできたことであると考えられる。

#### 主体的な読みと協働的な学習の相互作用

紘子のみならず、他の生徒も授業が進むにつ

れ、課題について深く考え、自分の思いをはっきりと述べることができるようになったように感じている。

何がそうさせたのであろうか。今回の実践を振り返ってみた。

1つ目に、学習課題設定までの協働的な営みである。最初は課題といっても思いつきや疑問を並べることからスタートしたが、個人からグループ、全体と話し合いをもつ中で、もまれ練られて学習課題として精選されていった。その際、論点を『その課題がみんなで深められるものであるかどうか』にしたことで、話し合いがずれずに進んでいった。時間はかかったが、3時間という時間で生徒の心に自らの課題として刻まれていったのではないだろうか。やらされる課題ではなく、協働で解決したい課題となったことが、のちの主体的な読みを生む大きな要因であると考えられる。

2つ目に、課題追究についての深ませ方である。前述した課題追究の時間の前にまず、個人で課題について自分なりの考えをもたせた。そのうえで、3つのスモールステップを踏み、徐々に深化できるようにした。あらかじめ個人で考えをもっていたことで、他の人の考えと比較しながら意見を戦わせたり、そこから新たな気づきが生まれたりしていた。

また、時間だけでなく、空間すなわち深め合う集団を変化させたことも協働的な学習をより深まらせたと考えられる。班活動やグループ活動は個の力を伸ばすためのものでないと意味がない。今までは一単元同グループで話し合いをすることが多く、馴れ合いになり、個の力どころか集団として深まらないことも度々あった。そこで、本単元は段階を経るごとに、チームのメンバーも変化させることで、馴れ合いにならず、課題追究を深まらせることにつながった。それぞれのチームには次の授業を自分達で行うという責任をもたせた。そのことにより、個の力＝個々の読みを最大限に生かしながら、チームとしての責任を果たすために協働的に読み込むというよい循環が生まれたと考える。主体的な読みは協働的な学習の中でさらに強固なものになり、協働的な学習は主体的な読みによって支えられていることを改めて感じさせられた。

#### 今後の課題

盆土産の学習が次に生きるためには、付けたい力を含めた1年間の学びの見通しを生徒にもたせていくことが必要であると感じている。本単元では、どんな力を身に付けさせるかという点において、

生徒があまり意識することなくあいまいなまま授業を行っていたのが課題であった。今後は、単元のねらいの焦点化を図り、それが学習課題や生徒が創る授業に反映できるようにしていきたい。そして、生徒自身が次はこんな力を付けたいと自然に学びが繰り上がるように意識づけていきたい。

最後に、紘子の振り返りにあったように、授業が楽しいことが学ぶ自信につながっており、これが学ぶことの本質であると感じている。こういう思いを全生徒に持たせることが教師の責務であると思いを新たにし、さらに実践を重ねていきたいと考えている。

#### 【参考文献】

- 京都市東山泉小中学校「研究報告会」2017
- 福井大学教育学部附属義務教育学校「研究紀要 第1号」2018
- 大村はま「教えるということ」筑摩書房 1996
- 木村優 岸野麻衣 編「授業研究」新曜社 2019